

のびのび教室から

- ☆ 通級児童 □人
- ☆ 指導時間 一人週 1時間から 8時間
- ☆ 指導内容 自立活動 教科補充指導(国語・算数)
- ☆ 指導目標 心理的な安定を図る 自己評価の向上を図る 社会適応能力の向上を図る  
コミュニケーション能力の向上を図る 自己コントロール力の向上を図る

困っている状態を改善・克服するための指導を子どものニーズに応じて行わなければなりません。通常学級での授業においてもその指導や効果が発揮されることも大切な点になります。特別な場での特別な指導になりますが、目指すことは、通常学級の中で、いかに自己実現できるように支援するかということです。在籍学級との連携が大切なことです。

I まず、認める、褒めるということから

II 個々人の特性に応じた指導を組みます。

実態把握・・・行動観察 アセスメント

※ 注意したいのは、診断名が付き、ああそうだったのかで終わりでは、子どもにラベルを付けただけになります。そこから、**指導支援につなげていくことが大切**。

- 本人の強みを生かした指導や支援を組み立てます。

特性をとらえることで、強い力を使って困り感や弱い部分を補完していく方法もとっています。できた喜び、自信から、**自尊感情を高めていきたい**と考えています。

(例) 個人内差の大きい児童 行動観察 WISC-III

- ① 視覚的な処理、絵や図の理解や操作は得意

聴覚的な処理、言葉の理解や操作は苦手という特性が明らかに。同時処理タイプ  
⇒視覚的な手掛かりを用いる、具体物を使用する、実践させるという支援が有効です。

- ② まったく反対の特性をもつ児童 あくまで個人内差 本人の中での強み

聴覚的な処理、言葉の理解や操作は得意  
視覚的な処理、絵や図の理解や操作は苦手という特性が明らかに。 継次処理タイプ  
⇒言葉で説明を加える、言葉で定義づける、ひとつずつ順を追って説明する。

III できることから取り組み、困り感にアプローチをしていく。

(苦手だからとそのことだけに特化して取り組むことは、子どもにとって学習の楽しさを感じにくく、できた喜びも感じにくいので、得意なことやできそうなことから取り組み、学習の楽しさを感じ、自信を持たせてから、徐々に困っていることに取り組んでいくように) △学習性無力感

IV 発達年齢にも配慮が必要 早期の気づきと配慮が大切

3年生くらいまでは、第一次支援、困り感にストレートに支援できるといわれています。

※ 書きには、書きの指導や支援をすることができます。

学年が上がると・・・配慮が必要になります。思春期に向かい周りの友達と比べ、自信を失い、自己肯定感が低くなりがちなので、メンタル面へのアプローチや配慮が必要になります

また、低～中学年までは、一般的なほめ方が良いが、高学年では、褒めるとき、言ったことやしたことの一部を取って返して褒めるのが有効になってきます。

V 支援は広く、指導は狭く